

これはまだ一年戦争が始まる前の話である。サイド3にある高級マンションの一室で、ハマーンの姉であるマレーネ・カーンとドズル・ザビの二人は、束の間の平和な時間を楽しんでいた。

「ドズル様……」

「どうした？」

「この争乱の時代は……一体いつになったら終わるのでしょうか？」

マレーネの言葉に、一瞬言葉が詰まるドズル。

「それは……俺にも判らん事だ。すまん……」

「いいえ、ドズル様が謝る事ではありませんわ。でも、この争いで沢山の人が亡くなり、沢山の人達が悲しみに暮れる事でしよう……」

「ああ、それは俺も充分判っておる。だが人が何か行動を起こす以上、それ相応の犠牲を伴う事は仕方が無い事なのだ。そして幸運にも生き残った者が決して忘れてはならん事は、それ以降の行動はその犠牲の上に成り立っているという事だ」

その言葉を言い終わった瞬間、ドズルはハッと我に返ったようにマレーネを見つめると、照れくさそうに言った。

「す…すまんマレーネ。ついいつもの癖で話してしまつて……」

「ふふつ。部下の前でお話をされる時は、いつもそんな感じなのですか？」

「ああ…こんな感じだ……本当にすまなかったな」

「いいえ、機会があつたら是非一度聞いてみたいと思つてましたわよ」

「ほう、それは嬉しい事を言ってくれる。…だが…私が今一番嬉しいのは…お前のこの声を聞く事だよ……」

ドズルはそう言うと、マレーネの体を優しくまさぐり始めた。

「ああっ……うんっ」

無骨な顔なのだが、その表情はいつもの険しい表情ではなく、とても穏和な表情をしていた。ドズルは叩き上げの人らしい無骨で固い手でマレーネの胸、腰、そして秘部を優しく触り、軽く体中にキスをした。その行為がとても感じるらしく、マレーネのよがり声が部屋中に響き渡った。

「ああん！ドズル様……そこ……っ……」

マレーネの顔が火照ったようになり、トロロンとした目でドズルに抱き付いたかと思うと濃厚なキスを交わした。驚くドズル。

「おっ、おい。今日はやけに積極的だな」

「だって、ずっとお会いしたかったのに……ドズル様ったらお仕事ばかりで……」

「ふふっ、これが欲しかったのか？」

ドズルはそう言うと、膝立ちの状態になりマレーネの目の前に自分のペニスを差し出した。それは大きく、上に向かってそそり立つような状態だった。

「ああっ、素敵……」

優しく口を含むマレーネ。ペニスを舐める音が静かな室内に響き渡った。しばらくその行為が続いたが、やがてドズルは彼女の股間に口を付け、優しく舌で愛撫し始めた。普段の清楚な姿からは想像も出

来ないようなやり声を上げるマレーネ。

「ああんっ！そ……うんっ……あっ！」

そして、お互いの準備が出来た頃、二人はどちらが誘うでもなく、一つになった。激しく腰を振るドズルの姿と、気持ちよい表情をしながら手を、足を絡めるマレーネの姿は、愛する二人のごく当たり前
の行為なのであるが、見方によつてはとても淫靡な行為に見えたことであろう。

*

*

*

話を少し遡るが、ドズルとマレーネが愛し合っている部屋は、ドズルが彼女と会う為に借りていて、そこへマレーネとハマーンが遊びに来るという場所だった。また、ドズルはマレーネだけではなく、ハマーンをも大変気に入っており、いつも実の妹の様に優しく接していた。ハマーンも最初はドズルの容姿に脅えていたのだが、その外見とは裏腹に大らかで優しい心を持っており、直情的ではあるがその真つ直ぐな男らしい性格だという事を知ると、彼に少しずつではあるが興味を抱いていった。

その為、マレーネがドズルと会う時は、ハマーンは『ドズルに会いたい』という思いから一緒に着いて行きたいと言う事が多くなった。マレーネもハマーンがドズルに好意を抱いているという事は、やはり嬉しいらしく、苦笑しながらもそれを拒むことは決してしなかった。それは顔や風体で人を判断する女性が多い中、身内であるハマーンはドズルが持っている本当の魅力を理解してくれた……それが何よ

りも嬉しかったからだ。

こうして姉に付いて行くハマーンだったが、姉とドズルが親しく話を始めると彼女はそっと席を外して外出するのだった。ハマーンも幼いとは言え大人の男女がする行為をそれなりには知っていたし、何よりも二人の幸せな顔を見るのがとつても好きで、自分がその場所にいる事でそれを壊したくなかったからだ。また、ドズルがその部屋を訪れる時は、決まって若い兵士を見張りとして連れて来ており、その間ドアの外へ待機させていた。見方によつては人の性行為の間の番人をさせられている訳であるから、不満に思う兵士がいても良い筈なのであるが、帰りには高級レストランで食事を御馳走してくれるという褒美がある為か、逆に志願する者が後を絶たなかった。

それというのもドズルが連れていくレストランというのは、高級将校やら金持ちクラスしか入れない場所であり、ドズルはこれもジオンを守る者達の社会勉強の為と言いながら一通りのマナーを兵士に教えるというのが毎回の恒例になっていた。とは言え、それが一通り終わると、庶民的な所へ場所を移動して一緒に羽目を外したり、時には悩みを真剣に聞いたり、その時ばかりは階級の差を全く意識せずに振る舞った。「顔は悪いが器は大きい」これがジオン兵のドズルへの素直な評価であった。

やがてハマーンはマレーネから合い鍵を貰うようになったのだが、行為に及んでいる間は外へ出ていたし、万が一行為が終わる前に戻って来ても、部下の兵士がハマーンに「あと**分位は……」と告げ

ていたので、うつかりその場を見てしまうという事は無かったのだ。

そう、あの日までは……。

*

*

*

その日、ハマーンは途中までマレーネと一緒にだったのだが、一人で街を散歩したいと言って別れたのだ。だが、それは口実であり先回りして部屋で隠れて驚かそうという他愛もない遊びだったのである。ハマーンはマレーネが見えなくなると、急いで先回りして合鍵を使って部屋に入った。土足厳禁の部屋だったので靴を隠して、クローゼットの中に入って姉が来るのをじっと待っていた。だが、運悪くマレーネはハマーンとドズルと一緒にやってくる若い兵士の為に果物やらケーキやらを買う為に時間を費やしていたのだった。そうしている内に、ハマーンはその場でウトウトと眠りに付いてしまった。

どの位経った頃だろうか、一通りの買い物を終えたマレーネがいつもの部屋へ向かおうとした時、側に車が停まった。助手席から顔を覗かせたのは、他でもないドズルだった。

「や……やあ、元気だったか？」

「ふふつ。ドズル様だったら……そんな他人行儀にならなくても構いませんのよ」

「そ…そうか？どうも私は…その、女性と話すのが苦手なのう……」

「ふふつ、もっと堂々としてらっしゃればいいのですよ。私になんか気を使っただけじゃなかったら、部下

に示しが付かなくなりますよ」

「そうは言っても……私はこんな顔をしてるので、女性とは、とんと縁が無かったからなあ。全くお前
といいゼナといい、こんな私のどこが気に入ったのだから……」

真剣に悩むドズルに、マレーネは顔を近付けながら言った。

「貴方が本当の漢だからですよ。私とゼナ……ゼナ様はちゃんと判ってますから……」

そう言っただズルの頬に優しくキスをするマレーネ。すると、運転席の男と目が合った。いや、実際には目があった筈……というのが本当の所である。なぜならその若い兵隊は目元を多うマスクをしていたのだから……。

「ドズル様……。彼は……？」

「ん？ おおっ、紹介が遅れたな。こいつはシャア……シャア・アズナブルだ。ガルマと仲が良くてな。私と違って頭も良いし軍人としてのセンスもあるので目をかけている一人だ」

ドズルが嬉しそうに話すと、シャアは口元を少しにや付かせながら答えた。

「ドズル様にお褒め預かりまして光栄であります」

「ふふ。お世辞はいい。ガルマの片腕となって働いてさえくれたらな」

「もちろん。ガルマ様の為になら喜んで……」

「そうかそうか！ 嬉しい事を言ってくれる。ますます気に入ったぞ！ はははっ」

ドズルはシャアの肩をポンと叩きながら嬉しそうに言った。マレーネはシャアが額にマスクをしていたのが少し気になったが、この時代そういう兵士は沢山いたので、あえてその事には触れなかった。そ

の後、マレーネはドズルの車に乗ってマンションの地下に車を停めた。そして契約してる部屋までエレベーターで上がった。エレベーターを降りるとドズルはシャアに対してドアの外で待機するように伝えて部屋の中に入るのだった。シャアはそれを敬礼をしながら見送った。ドアが閉まると険しい表情が解け、薄笑いを浮かべていたのだが、それを知る者は誰もいなかった。

「ふふっ……ドズル様も何故私などを気に入って部下にしてくれるのやら……。私の素性もある程度は知ってる筈なのに……」

そう思ったシャアだが、やがて軍人らしく直立不動の姿勢を採り、粛々と任務を遂行するのだった。『まあいい。今はまだその時期ではないから……』

そのマスクの底に、復讐心が宿っているのをドズルが知るのは、もう少し後になってからの事だった。

*

*

*

最上階にある部屋に入るとドズルは、もう待てないとばかりにマレーネを優しく抱き締めてキスをした。しばらくそのままの時間が流れ、やがてどちらからともなく浴室へ向かった。仲良くシャワーを浴びながら、お互いの体をまさぐり合う二人。ドズルの手がマレーネの胸を優しく揉むと、浴室に彼女の喘ぎ声が響き渡った。

「ああっ……ド……ドズル様……こんな場所で……」

「もう我慢が出来んだ……ここで……」

「お気持ちは判りますが、ベッドまで我慢して下さいませ。その分私がたっぷりとご奉仕させて頂きませわ……」

「あ……お前がそう言うなら……」

マレーネの頬を赤らめた仕草に、ドズルの心はとても高鳴るのだった。

「ありがとうございます。ドズル様……」

マレーネはそう言っただけキスをする、先に浴室から出た。ドズルも体の汗を洗い流した後に後を追う感じで出ると、化粧台の前でマレーネが裸のまま髪を乾かしていた。間接照明に照らされるマレーネの姿に、ドズルは思わず見とれてしまっていた。やがてマレーネが気づき、頬を赤らめながらこう答えた。

「あつ、ド……ドズル様……いらしたんですね。ああ……こんな姿で……恥ずかしいですわ……」

「ふふ……綺麗だよ……マレーネ……」

「ドズル様……嬉しいですわ……」

マレーネはドズルを椅子に座らせて髪を乾かし、それが終わるとそっと後ろから抱き付くのだった。そして耳元でこう囁くのだった。

「さあ……いたしましょう……ドズル様」

その言葉を境に、ドズルの押さえていた心が一気に開放された。振り向いてマレーネを優しく抱き抱えてベッドに行き、そのまま獣のようにマレーネの胸に吸い付いた。

「ああ……ドズル様……」

「マレーネ……愛してるよ……」

「わ…私もです……ああつ、もつと……もつと愛して……もつと激しく……」
そこには、理性を開放して本能のまま愛し合う二人の姿があった。

*

*

*

『ん？何なの？この声……？』

クローゼットの中で寝ていたハマーンは、男女の奇妙な声が部屋から聞こえているを感じて目を覚ました。

『誰？……お姉様？……苦しんでるの？』

ハマーンは、一瞬姉が部屋で苦しんでいるのかと思った。だが、それにしては声の出し方が変であり、時々ドズルの名前を叫びながら、ごそごそとベッドの上で動く様な感じだった。そして、時々ドズルの声も聞こえた。ハマーンはその声から、ある結論を導き出そうとしたのだが、心の中ではどうしてもそれを認められなかったのであった。その為、このままじっとしていてその場をやり過ごそうとしたのだ。だが、その時ベッドの方からマレーネがドズルにこう話すのが聞こえた。

「ドズル様……もう我慢出来ません……そのペニスを私のここに入れて下さいまし」

「いいのか？マレーネ？」

「ええっ……来て……」

「よし……入れるぞ……」

「ああっ……いいっ!!!!!!!!あああっ!!!!」

部屋中にマレーネの喘ぎ声が響き渡った。その瞬間、ハマーンの推測は確信に変わった。

『お姉さまとドズル様は……セックスをしてる!!!!』

ハマーンの心臓がドクドクと勢い良く鳴り響いた。ハマーンも愛する男女がセックスという行為を行う事は知識として知っていたし、姉とドズルがそういう仲だという事も薄々ではあるが判っていた。だが、それとその行為の現場にいるという事は話が別だった。自分が大好きな姉と、自分が憧れるドズルが、扉一枚隔てた向こう側で、普段からは想像も出来ないような喘ぎ声を叫びつつ獣のような行為をしている……。そうしていると、ハマーンの心の中に、ドロツとしたモノが流れるような気がした。そして頭の中である事がグルグルと渦巻き始めた。

『……見てみたい……お姉さまとドズル様のセックスを……』

ハマーンはその行為を理性で必死に押さえようとした。しかし、扉の外から聞こえてくる二人の絡み合う声に、好奇心がうち勝ってしまったのも、ある種仕方が無い事かも知れなかった。そつと扉を少しだけ開けてみるハマーン。すると、そこには裸のドズルの上でしゃがみながら上下に動く裸の姉が見えた。表情は頬が赤らみ、とても気持ち良さそうな表情をしながら、天井の方を向いて喘ぎ声を出していた。よく見ると、ドズルのペニスが姉のあそこに激しく出入りしていた。ハマーンの心に激しい衝撃が貫いた。

『あ……これが……セックス……』

ハマーンは見てはいけないものを見たような罪悪感に襲われた。しかし、その直後罪悪感とは別に、それを知ってしまったという背徳な気持ちも同時に芽生えるのだった。ハマーンの呼吸が荒くなり、体が火照るのを感じていた。また、下半身の大切な部分から愛液が出ているのを感じていた。ハマーンも既にオナニー自体は経験済みなのだが、余程の事が無い限り行う事は無かったのだが、この一種異様な環境に置かれては理性を保つ方が無理と言えよう。

『熱い……』

ハマーンは着てる服を気付かれないように脱ぎ始めた。上着を脱ぎ、ブラを外し、靴下を脱ぎ、スカートを降ろした。姉とドズルが扉一枚隔てた向こうで激しい行為をしている。それを隙間から覗きつつ、ハマーンは自分の指をショーツ越しにクリトリスへそつと這わせた。すると彼女の体に電気が流れたような刺激が貫き、一瞬声をあげそうになった。

『ダメ……こんな事しちゃ……でも……気持ちいい……指が止まらない……』

背徳な気持ちと罪悪感が、彼女に更なる快楽をもたらしていた。やがてハマーンはショーツの中に直接手を入れてあそこを触っていたのだが、やがてそれも脱ぎ、裸の状態になりながら延々と快楽を貪っていた。このまま時が延々と続いて欲しい……自分の下半身から出た愛液を舐めつつ、トロンとした目をしながら彼女はそう思っていた。やがて、ハマーンは姉とドズルの何度目かの絶頂シーンを見ながら、自分も一緒に登り詰めた。まるで自分が姉の立場であるかのように……。

*

*

*

「ドズル様……」

何度目かの絶頂を迎えた後、マレーネとドズルは寄り添うようにベッドで寝ていた。どちらもとても満ち足りた表情をしており、とても幸せそうだった。しばらくそうしていると、マレーネはドズルの股間を軽く掴んでこう言うのだった。

「まだ、終わりではありませんですよ。ドズル様」

ドズルの顔から少し冷や汗が流れた。

「そつ、そんな事は無いが……少し休ませてくれんと、体が持たんぞ……」

「そんな事言っても、この火照る体は収まりませんよ。では、この前のように私を縛ってバイブでよがり狂わせて下さいますか？」

彼女は、ドズルの胸の上に座ると、我慢し切れないと言わんばかりにオナニーを始めるのだった。しばらくそれを見ていたドズルだが、やがてこう呟いた。

「お前も好きだな……」

「ええ、全てドズル様に開発されましたわ、前も……後ろも……」

マレーネはドズルのペニスをくわえると、シックスナインの格好になり、一心不乱にしゃぶり始めた。

ドズルは彼女のあそこをいじったりこねくり回したりしていたが、やがて絶頂の時を迎えた。

「あつ……出るぞ……」

「ええつ、出して！」

普段の彼女からは想像も出来ない言葉だった。やがて、ドズルの体が硬直したかと思うと、彼のペニスから勢い良くミルクが飛び出し、彼女の口の中へと注ぎ込まれた。それを美味しそうに飲み干すマレーネ。行為が終わった後、水を一口含んで口内の精液を飲み干したマレーネは、ドズルの側に寄り添った。お互いまだ満ち足りてない様子であった。

「マレーネ……この前使ったアレ……どこにあるんだ？」

「えっ？ああっ、あのバイブですね。そのクローゼットの中に仕舞ってますわ。それでよがり狂う私を見たいのですか？」

その言葉にコクリと頷くドズル。それを見てマレーネは嬉しそうにベッドから降りると、近くにあるクローゼットの扉を開けるのだった。その直後、マレーネは一瞬驚きの声をあげたかと思うと、その場で固まってしまった。

「どうした？一体何かあった……！！！」

ドズルが不思議そうにそちらを見た時、目に飛び込んできたのは、クローゼットの中で裸のまま膝を抱えて震えているハマーンだった。驚きながらも、冷静を装いながら問いかけるドズル。

「ハ……ハマーンちゃん……なのかい？」

その言葉に、ハマーンはビクツとしたかと思うと、真っ赤な顔をしてシャツだけを握りしめながら、クローゼットから飛び出すと、そのまま部屋の外へ飛び出して行った。ハマーンとしては、見てはいけない行為を見てしまった事と、それを知られてしまった事、そしてその行為を見ながらオナニーをしていた事が全て見付かってしまって、パニック状態に陥り、とにかくこの場から逃げ出したいと思う一心

だった。

呆氣にとられた二人が、我に帰ってドアに向かったのは、ハマーンが部屋のドアを飛び出してから十秒以上経ってからの事だった。

*

*

*

時間を少しだけ遡るが、ドアの外で二人の行為が終わるのを待たされているシヤアは、直立不動の姿勢を保ちながらも、心の中ではこれからの自分が採るべき道の事を考えていた。そうしていた所、ドアが勢いよく開き、中から全裸の少女が服を抱えたまま飛び出して来た。そしてシヤアとぶつかり二人共転びそうになった。

「あっ！」

ハマーンが驚きの声をあげて転ぼうとした時、シヤアは咄嗟の行動で彼女の下になるような感じで床に崩れ落ちた。もちろん、ハマーンの体に傷を付けない為である。

「ふう。だ……大丈夫かい？」

シヤアとハマーンは一瞬目が有ったのだが、ハマーンは再び顔を真っ赤にしたかと思うと、エレベーターの方へ行き、ボタンを押しても来ないと判った瞬間、隣にある階段を駆け上がった。やがて屋上の扉を開けて外へ出る音が響き渡った。シヤアはハマーンが駆け上がった階段を昇り、屋上の扉が開いてる事を確認すると、ドズルへ無線を入れた。

「ドズル様。シャア・アズナブルです。先程部屋から飛び出して来た少女……ハマーン様だと思われませんが……彼女は……」

そこまで言った時、ドズルの慌てた声が話を遮った。

「そう！ハマーンちゃんだ！どこにいる！？追跡したのか！？」

「はい。屋上に駆け上がりました。しかし、一体何故裸で外に飛び出すような事を……」

その言葉に、ドズルは一週躊躇したのだが、こう答えた。

「それは……まあ……察してくれ」

「……判りました」

「そこでだ。シャア、君にはハマーンちゃんを説得して部屋まで連れ帰ってきて欲しい。私達は部屋で待っている。いいな、頼むぞ」

「り……了解。必ずや連れ帰ってみせます」

「うむ」

そう返事はしたものの、シャアは内心穏やかで無かった。

『やれやれ、何故私がザビ家のスキャンダルの後始末をしなきゃならんだ。まったく面倒な……』

仕事と割り切り、階段を昇るシャア。その時、彼の頭によぎるものがあつた。

『待てよ。ここでザビ家に恩を売っておくのも悪くはない……か』

今回の騒動も全て後に生きてくる……そう考えた時、シャアの思考は通常よりも遙かに鋭く働くのだつた。

*

*

*

屋上へ出たシャアは、静かに気配がずる方へ歩いていった。すると、建物の隅でシャツ一枚を羽織りながら、膝を抱えてすすり泣くハマーンの姿があった。シャアはやれやれというような表情をしながら、精一杯優しく声をかけた。

「ハマーン・カーン様……」

その声にビクツとするハマーン。

「あ……来ないで……いや……来ないで！」

「落ち着いて下さい。ハマーン様。私は……キヤスバ……シャア・アズナブルと申します」

そう言いながら、少しずつ彼女に近寄るシャア。ハマーンの顔は恐怖に引きつり、後ずざりをしたのだが、柵と壁にぶつかり、それ以上は動けなかった。また、足がすくんで、そこから逃げ出すことも出来なかった。

「あ……ご免なさい。もうしません。もうしませんから！どうか許して下さい」

パニック状態になり、泣きながら許しを請うハマーン。それを見てシャアはハマーンの側まで来ると目線までしゃがみ込んで、そっと顔のマスクを取り去り本来の姿を晒した。それを見てハマーンの鳴き声が止まった瞬間に、シャアは彼女の間近まで顔を近付けて、微笑みながらこう話した。

「……泣いている時より、笑った時の方が可愛いですよ。ハマーン様」

「えっ？」

「ふふっ、落ち着きましたか？お側へ座ってもいいですか？」

シアアの言葉に、コクリと頷くハマーン。シアアは彼女の隣へ座ると、自分の方からは何も話さず、じっと空を見つめているだけの時間が流れた。どの位経った頃だろうか。ハマーンがしびれを切らした様に話し始めた。いつもの冷静さを取り戻したかのような口調で……。

「私を連れ戻しに来たのでは無いのか？」

「そうですが……帰りたいのですか？」

「……帰りたく……無い」

「ドズル様とマレーネ様をお嫌いになつたという訳ですか？」

「そんな事はない！ドズル・ザビ様は御自分の立場が判る立派なお方よ。お前もあの方を顔で判断するかもしれないけど、そんな事では本当の人の素敵さを見誤る事になりかねないわ。もし姉が惚れてなかつたら私がドズル様の妾になりたかつたのに……」

その言葉を聞いて、シアアは心の中で『やれやれ……』と思った。するとハマーンが押さえていた気持ち吐き出すように話を続けた。

「私……ドズル様とお姉様の……その……あれを覗く気なんて全く無かつたのに……。ただ先に帰って隠れていて驚かそうと思っただけだったのに……眠ってしまつて……」

そう答えるハマーンに、シアアは優しく、本当に優しく抱き締めるのだった。ハマーンの心に安らぎが戻ってきた。

「お話を……続けて下さい。ハマーン様の心の整理が付くまで……」

「ありがとうございます……えっと……」

「シヤア……シヤア・アズナブルと言います。以後、お見知り置きを……」

「シヤア・アズナブルか……ドズル様やランバ・ラル様程ではないが、お前もいい男だな……」

「ほう。ラル様を知っているのですか？」

「ええ、以前2回程会った事があるわ。ラル様の部隊の方々つて、見かけは悪そうな人が多いんだけど、みんな私に優しくしてくれたわ。だから私、お礼にみんなの頬にキスしてあげたのよ」

ハマーンはそう言うと、シヤアの頬に軽くキスをした。

「今日のお礼よ」

ハマーンの顔に笑顔が戻ってきた。その後、ハマーンはしばらくシヤアと話をした後、彼の軍服を重ね着して一緒に部屋へ帰った。部屋にはドズルの姿は既に無く無く、マレーネだけが心配そうな表情で待っていた。マレーネはハマーンを見ると、心配そうに近寄りそつと抱き締めた。マレーネにしがみ付くハマーン。それを見たシヤアは一礼をして部屋から出ると地下へ停めてある車へと戻った。そこには後部座席に座っているドズルの姿があった。シヤアは軽く敬礼を済ませてから車へ乗り込み、こう告げた。

「ハマーン様は無事に部屋まで連れ戻しました。どうやらマレーネ様を驚かそうと思って待っていたらしいです。それでつい寝てしまつて……」

「そうか……嫌われてなければいいのだが……」

「それは問題無さそうです。ハマーン様もそれなりには理解してる様ですから……」

「下手に気を使わない方が良いと言う事か……」

「ええ、ドズル様もいつも通りにハマーン様へ接して頂ければ良いかと……」

「うむ。判った。お前には本当に頼りになる男だな」

「いいえ……私は当然の事をしたまでです……」

そう言うと、シヤアは話を続けた。

「ドズル様は……その……ハマーン様を気に入っておられるのですか？」

「ん？ああ、そうだな……。ハマーンちゃんは明るくて素直でとっても可愛い娘だからな。それに、マレーネとは性格こそ違うが、あの娘は相手次第で延びもすれば滅びもする非常に興味深い娘だ。本当はガルマの嫁にとも思っておったが、ヤツにはイセリナがおるからなあ……。そうだ、シヤア、お前はどうか？付き合ってみるなら紹介するぞ」

「わ……私が……ですか？」

「そうだ。今はまだ幼く見えるかも知れんが、必ずやお前の為に働いてくれる人間になる筈だ。もっとも、お前が使われるかも知れないがな……はははははっ！」

そう言うと、ドズルは大声で笑った。シヤアはマスク越しにはあるが少し困惑した表情を浮かべながらこう答えた。

「私はまだ学ぶべき事が沢山あります。女性とお付き合いするなどという事を考える余裕などありません」

「そうか、その心がけは立派だな。だが、彼女に興味があるならいつでも私に言うがいい。お前なら喜んで紹介してやるぞ」

「はっ、ありがとうございます。カーン家は名門ですし、彼女も姉に劣らずの美人になる事でしようから……将来縁があれば……」

「ははは、そうかそうか。それもまたいいだろう。将来の楽しみがまた一つ増えたわい」

『やれやれ……でもあの娘もアルテイシアのように調教して自分好みの女性へと仕込むのも……面白いかもな……ふふふっ』

シャアは心の中でそんな事を思いながら、キーを回して車を走らせると繁華街の街並みへと消えていった。この縁が、後にハマーンとシャアがアステロイドベルトにて再会し、付き合い、そしてとても深い仲へと発展していく事になろうとは、この時点では知る由もなかった。

*

*

*

エピローグ

シャアが去った後、ハマーンはマレーネと共にシャワーを浴び、彼女から優しく愛する男女の営みについて教わるのだった。それはハマーンにとっては刺激的な事が多々含まれていたが、決して嫌悪する事ではなく様々な愛の形があるという事を、マレーネは丁寧に、優しく教えるのだった。また、ハマーンがクローゼットの中で行っていたオナニー行為も何らとがめる事はなく、むしろ正常な女性の行為で

ある事であると告げた。ただし異常な環境での強烈な刺激と興奮は、どんどんエスカレートしてしまうので気を付けるようにという事も付け加えるのだった。

それからしばらくした頃、ドズルがいる司令部を単独で訪れるハマーンの姿があった。手にはピンク色の花束を持って……。その訪問が余りにも突然だったので、ハマーンの姿を見るや否や、ドズルは一瞬躊躇したが、精一杯の冷静さを装いながら言った。

「ハ……ハマーンちゃんじゃないか。今日は一体どうしたんだい？それもバラの花束なんか持って……」
その言葉に、ハマーンは一瞬間を置いてから、こう答えた。

「この間は姉との大切な時間を台無しにしてしまい、大変失礼しました。今日は私の意思でそのお詫びをしに来了次第です。これは、私からドズル様へのお気持ちです」

花束を手渡すハマーン。その時、同じ視線に下がってくれたドズルに、彼女はそっと囁いた。

「ゼナ様、そしてお姉様に負けない位、私もドズル様の事が大好きです！」

ドズルの頬に軽くキスをするハマーン。その瞬間、司令部にはどよめきと冷やかし、そしてそれを喜ぶ部下の歓声が響き渡った。しばらくした後、頬を赤らめながら軽く会釈をしてその場を去ろうとしたハマーンを、ドズルが呼び止めた。そして、花束の中から一輪だけ抜き取ると、枝を短く折ってハマーンの胸ポケットにそっと差した。

「そのバラを今日という日の記念にするといい。また三人で遊ぼう……な？」

「はいっ！喜んで！」

そう言うと、笑顔で司令部を去るハマーン。後には嬉しそうな表情のドズルと、それを冷やかしている司令部の部下達が残った。ドズルはしばらくして我に帰ると、いつもの表情に戻りながら、怒鳴り口調でこう叫ぶのだった。

「貴様ら！少し騒ぎすぎだぞ！場所をわきましろ！！」

一瞬にして沈黙する司令部。……そしてドズルは更に話を続けた。

「だがまあ……今日この場にいた者は運がいいな。交代勤務が終わった後、私のポケットマネーで好きなだけ飲んで食って騒いでいいのだから……」

一瞬キョトンとする一同。その中の一人がおもむろに問いかけた。

「ドズル様……それは……ひょっとして……」

「うむ。私は今日とても気分が良いのだ。皆と共に夜通し騒ごうぞ！」

その瞬間、再び司令部に歓喜の声がこだまするのだった。

これは、とある時代の……サイド3での、小さな小さなエピソード……。……。

運命の出会い 完

